

雪

僕は、伊勢崎駅近くの友達の家を出て、自宅に帰るため駅前通りを南に向かった。友達の家では、コンタクトダンスの動画をユーチューブで見せてもらった。友達のお母さんが今はまっているらしい。

重力や重心をうまく使って、相手に触れ続けながら自由に思うままに踊れ、そう言われてもなア。

運動神経が鈍く、そのうえ不器用な僕には無理だと思った。

僕は信号を右に折れ、小学校の南側の通りを西へ向かった。途中、おじさんが白いハンカチーフで額の汗を拭っていた。誰もいない校庭を見つめながら。今は夏休み中だ。そのうえ今日はとても暑い。校庭で遊んでいる子などいるはずがない。最近は変な大人が多いから気をつけなければならない。僕はそっぽを向いておじさんと自販機の間を小走りですり抜けた。

図書館を過ぎ橋を渡りかけた僕は、橋の中央付近で欄干から身を乗り出し、川を覗き込んでいる少年を見つけた。僕は、危ないなア、と思いながら少年に近づいた。「危ないよ」と声を掛けると、少年は乗り出していた身を引いて姿勢を正した。そして僕を見て、「鳥がたくさん泳いでいる」と言った。「カルガモだよ」と教えてやると、「カルガモ、正解！」と言ってうれしそうに笑った。

……正解？

少年は、Tシャツに半ズボン、野球帽を被っていた。痩せて小柄で全体が薄汚れて見えた。半ズボンの尻のポケットが片方破れていた。

この辺では見かけない子だったので、僕は「どこの学校？」と尋ねた。少年は答えなかった。「どこに住んでるの？」と尋ねたがやはり答えなかった。

自転車のブレーキ音がして後ろから急に頭を小突かれた。振り向くと自転車に乗ったお姉ちゃんだった。六歳年上のお姉ちゃんは、高校受験のため、夏休み中ずっと図書館の自習室で勉強している。

「何ひとりごと言ってるの？ おかしな子ねエ」

「ひとりごとじゃないよ、僕はこの子と。あれエ……？」

さっきまで話していた少年は消えていた。

「バカ！」と言い捨てると、お姉ちゃんは家の方角へ自転車で走り去った。

二学期が始まり暫く立った頃、学校帰りに僕はまた少年を見かけた。少年は土手の道をひとりで歩いていた。Tシャツに半ズボン、野球帽、この前と同じ格好をしていた。僕は少年を追いかけようと思って土手の道に出たが、なぜか急にバカらしくなり追うのを止めた。僕は少年の後ろ姿をただ見送った。少年の後ろ姿は、春でもないのに陽炎に揺れていた。それもごく狭い範囲、少年の後ろ姿のみが陽炎に揺れていた。そして僕が目をごすっている間にその姿は消えてしまった。

次に少年を見かけたのは近所の公園だった。勢いよくブランコを漕いでいた。秋が深まり冬が近いというのに、少年は相変わらずTシャツに半ズボン姿だった。野球帽も被っていた。僕が「やあ、また会ったね」と声を掛けると、少年はブランコを降り、手招きで僕をジャングルジムへと誘った。

小さな公園で他に人はいなかった。僕たちは金属パイプの骨組みを昇ったり、ぶら下がったり、座ったりして時間を忘れて遊んだ。遊びながら色々な話をした。意外にも少年は話し好きだった。話の中で、少年が札幌生まれであること、札幌、青森、新潟と移り住んで来たこと、つい最近この近くの長屋に引っ越してきたこと、父親はなく母親とふたり暮らしであることが分かった。また、少年がこれまで一度も学校に行ったことがないということも分かった。

「学校行かなくて勉強大丈夫？」

「大丈夫！」

少年は、小枝を拾うと、屈んで地面に何やら数式らしきものを書き込んだ。

$$ab+a+b+1=(ab+a)+(b+1)=a(b+1)+1\cdot(b+1)$$

そして僕に「これ分かるか？」と訊いた。僕が黙って首を横に振ると、「分かるわけねえよな、小学生には」と言って笑い、さらに数式を書き加えた。

$$=(b+1)(a+1)$$

次に少年は、桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 と書き、「読んでみる」と言った。僕が黙って首を横に振ると、「読めるわけねえよな、小学生には」と言って、また笑った。

「いつまで遊んでるの、夕飯の時間よ。またひとりごとと言ってたでしょう」

振り向くとお姉ちゃんが鬼のような顔で立っていた。サヨナラを言おうと少年に向き直ると、少年は消えていた。地面にはわけの分からない数式が記され、またその横に読めない漢字が縦書きで三行記されていた。

僕は少年の名を訊き忘れたことを後悔した。僕も名乗るのを忘れていたけれど。

「何よこれ、因数分解ね。それとこれは漢詩ね。ものようようたる、しゃくしゃくたり其の華、この子ゆきとつぐ。みずみずしい桃よ、花はなやかに、娘さんはお嫁に行く、という意味ね。いったい誰が書いたの？」

僕はその後何度か少年を見かけた。橋の上で、土手の道で、公園で、街角で。僕は何度か少年と話し、そして何度かいっしょに遊んだ。僕はその度に少年の名を訊き忘れ、僕も名乗るのを忘れた。

12月初旬、僕は郵便局の前で少年と偶然出会った。お母さんに頼まれ年賀状を買いに行った帰りだった。僕たちは郵便局の前の通りを西の方角へ、ふたりの家がある方角へと歩いた。とても寒い日なのに少年は相変わらずTシャツに半ズボン、そして野球帽を被っていた。

僕は忘れていたことを思い出し、ハッとして「君の名前は？」と少年に尋ねた。少年は口の前で人差し指を立て「シッ」と言い、そしてその指を自転車で道路を無理に横切ろうとしている老人に向けた。自転車に乗った老人に軽トラックが迫っていた。

あッ、危ない！ と思った瞬間、自転車と老人は軽自動車に跳ね上げられ、老人は道路に叩きつけられた。仰向けに倒れた老人の上に自転車が落下し、自転車の下敷きとなった老人は、血まみれで痙攣を起こしていた。辺りが騒がしくなった。

……騒がしくなるはずだった。……でもそうはならなかった。

事故の場面は、僕の頭の中で動画を巻き戻すように巻き戻され、老人に軽トラックが迫っているシーンに戻った。少年が指を向ける。すると自転車と老人が消え、目の前を軽トラックが何事もなく走り去った。

僕は驚いた。僕は一瞬夢を見ていたのだろうか？

少年がゆっくりと信号機のある交差点を指差した。老人が自転車を押しながら横断歩道を渡っていた。

「ほんの少し時間と空間を調整しただけさ」

少年がニヤリと笑った。それから少年は、「しちやいけないことしちまったぜ。見せちやいけないもの見せちまったぜ。こりゃさっさと戻れと言われるなァ」と呟き、空を見上げた。

……戻る？

僕も空を見上げた。青い空の一角に、天使が羽を広げたような白い雲が見えた。僕が空を見上げている間に少年は消えた。

～♪～ Silent night! Holy night!

All is calm, all is bright

Round yon virgin mother and child! ～♪～

どこからともなくクリスマスソングが聞こえた。

僕は家に帰るとお母さんに少年のことを話した。不思議な体験をしたことも。お母さんは笑いながら聞いていた。僕が冗談を言っていると思ったに違いない。でも最後にお母さんは、「変ねェ、長屋は取り壊されて、今そこは住宅地として売りに出されているはずなんだけど」と、気になることを言った。

翌日、僕は、近所の話し好きのおじさんをつかまえて長屋のことを訊いた。するとその古い長屋は数年前取り壊され、跡地は住宅地として売りに出されているということが分かった。お母さんの言うとおりであった。跡地にはなかなか買い手がつかないらしい。

「そういえば長屋には若い母親と小さな男の子が住んでいたなァ。キャバクラ勤めのだらしない母親でなァ。新潟から流れてきたらしいが、いつも酒臭かった。家賃を滞納して夜逃げしちまったよ、小さな子供だけ残してなァ。ひでえもんだぜ。子供は施設に預けられたが、その後病気で死んだらしいぜ」

僕は長屋の跡地を見に行った。不動産会社の幟が風にはためいていた。公園にも行ってみた。少年はいなかった。なぜか僕は少年とはもう会うことがないと思った。

クリスマス・イブの前の晩、お母さんが「珍しく明日は午後から雪になるそうよ。おか

しいわねェ、雪なんて滅多に降らない土地柄なのに」と言った。

札幌、青森、新潟。僕の頭に少年の言葉が浮かんだ。雪に埋もれた街の景色とともに。

お母さんの言ったとおりクリスマス・イブは雪になった。しかも積もるほどの大雪だった。僕は、家族みんなとフライドチキンを食べ、そしてケーキを食べ終わると、二階の自分の部屋でゲーム機に夢中になった。ゲーム機は新製品で、クリスマスプレゼントとしてお父さんに買ってもらったものだ。

でも、ゲームに集中していても、僕は心の隅で少年のことを考えていた。不思議な力を持った少年。お姉ちゃんには見えない少年。おそらく僕にしか見えないのだろう。異世界から来た少年。だけど僕は少年を怖いと思ったことは一度もなかった。どちらかといえば好きだった。あの少年も僕のことを気に入っていたはずだ。

暫くすると、「もう寝なさい」と階段の下からお母さんの声がした。そして、ドアを勝手に開け入って来たお姉ちゃんにゲーム機を取り上げられた。逆らったりすると面倒なことになるので、僕は黙って寝ることにした。

なかなか寝付けなかった。何度も寝返りを打った。

しんしんと雪が降っている。外にも、そして僕の心の中にも。

Snow falls in silence It's snowing outside It's snowing in my heart

壁越しに隣の部屋で英語を勉強しているお姉ちゃんの声が聞こえた。

コツンと窓に何か石のようなものがぶつかる音がした。僕は窓を開け外を見た。誰もいなかった。細かい雪が降り、細かい雪が積もって行くだけだった。

僕は公園へ続く道路に目をやった。すると外灯に照らされた道路に小さな足跡が続いていた。誰の姿も見えないのに新しい足跡が雪の上にくっきりと刻まれて行く。僕は、寒さも忘れ、刻まれて行く足跡を目で追った。

きっとあの少年だ。あの少年が僕にサヨナラを言いに来てくれたのだ。

思わず窓から身を乗り出した僕は、見えない少年に向かって「サヨナラ」と叫んでいた。